

ミヤール物語

平成三年の三月はじめ、体育教官室の窓を開けて空気を入れ換えていたら、子猫がヨタヨタしながら入ってきた。両手ですくうとすっぱり収まるぐらい。大ききから推定すると生まれて一ヶ月も経っていない。たぶん、飼い主が捨てていったのだろう。痩せてヒョロヒョロしていた。抱き上げて名前を聞いた。

「おまえ、名前はなんていうんだ?」「ミヤール」「おー、そうかミヤールか、ミヤールっていうのか」「どっから来た?」「……」「きつと飼い主に捨てられたんだな」

腹を空かしているだろうと思って牛乳を買いに行き、皿に移してやると、ピチャピチャと音をたてて舐めた。三回ぐらい継ぎ足してやったらやっと治まった。次は何をするのだろうと思って見ていると、ソファアの上によじのぼり、姿勢を丸く整えてから寝た。

最初は飼ってやる気などまったくなく、ただ、腹を空かしているだろうと思って牛乳を与えてやっただけだった。が、翌日の朝学校へ行くこととミヤールはちゃんと教官室の前で私を待っていた。それで、また同じことを繰り返す。

そんなことが数日過ぎると、もう情が移ってしまう。外で寝るのは寒いだろうというので、帰る時は教官室に入れて帰る。翌朝行くとミヤールはちゃんとソファアで寝ている。そうなると、夜オシッコをする時は困るだろうから、ミヤール用のトイレを教官室の中に設置しなければならぬ。器と猫砂を買いに行き、トイレを作る。猫は犬よりも、頭は悪いがきれい好きだから、トイレのしつけは犬よりも楽だ。すぐにトイレの習慣はついた。

次は夜間の出入りだ。我々が帰ってから翌朝まで、じつと一人で教官室に居るのも退屈だろう。猫は夜行性だから、夜は散歩をしたいにちがいない。そこで、ミヤールが進入してきた窓の端っこを改良し、一〇センチ四方のリバーシブルドアを作つてやり、そこから自由に出入りできるようにした。そのドアから出入りするには、真下に花壇があるからそれをいちいち飛び越えなければならぬ。それは面倒だ。そこで、ミヤール専用のドアから花壇の端まで、専用階段をこしらえてやった。こうしてとうとうミヤールは、体育教官室に居着いてしまった。

その年の秋、私はミヤールを動物病院に連れていった。まだ充分おとなに成りきつてなかったが、不妊手術を受けさせるためだ。ミヤールはメス猫だった。学校周辺には野良猫がうようよ居る。もしミヤールが、こどもでも生んだらやっかいだ。私は、ミヤールを学校で飼うことは心配だった。学校側から、「学校で飼うのはやめてください」と言われはしないかとビクビクしていた。だから、ミヤールのことでクレームをつけられるようなことは一切ないように気を配った。それで、不妊手術も早めたのである。

ミヤールが二回目の入院をしたのは、平成九年の秋だった。散歩から戻ってきたミヤールのシッポが半分ちぎれかかっている。たぶん、ドアか何かではさんだのだろう。すぐに病院に連れていき、縫合してもらったが結局、数日経ってからシッポを切断する手術を再度受けた。傷が大きすぎて傷から先が腐り始めたのだ。それで、二〇センチ以上あったシッポが七センチくらいになってしまった。それでもちゃんとシッポの役目は果たしており、昼寝の最中に「ミヤール」と呼ぶとシッポをパタパタしてちゃんと返事をする。

ミヤールが引き起こした事件は数え上げればきりが無い。きりが無いが、例えばどこかの台所からサンマを盗んできたとか、何かを壊したとかいう事件ではない。すべて自分に関わる事件だ。ミヤールはみんなにかわいがられるから、学校中どこでも出入りする。侵入したのを知らずに誰かがそこを閉め、翌朝人が来るまでそこにミヤール



は閉じこめられたままになる。そんなことはしょっちゅうだ。最初は、「ミヤーが帰って来ない」というので遅くまで探しまわることがしばしばあったが、そのうちこっちも慣れて、「またどっかに閉じこめられているんだろ。朝には帰ってくるよ」といって心配しなくなった。

声はすれども姿が見えない。それで探し回って救出したのが三回ある。すべて高いところに登って自分でもどうすることもできずにいた事件だった。一回目は平成六年の夏だった。練習が終わって帰る頃、ミヤーに声をかけると遠くから返事が返ってきた。演劇部室あたりだ。捜すけどわからない。何回も呼ぶ。ひよいと上を見上げると、天井のハリにちょこんと座って身動きできないでいるミヤーが見えた。来た通りの道を戻ればいいのだが、猫にそんな知恵はない。私は、ギャラリイに上がってミヤーを呼んだがミヤーは動かない。そこで、もし落ちたときのために、ミヤーの真下に器械体操用のスポンジマットを敷いて救出に向かった。私もハリを登ってミヤーをつかまえようというのだ。ひとりでは大変だから林田先生の応援を頼んだ。夜の九時頃、林田先生はクルマでかけつけてくれた。救出されたミヤーは、私の肩にしっかりとまつて震えている。床に下りてもまだ震えが止まらなかった。

二回目は平成八年。体育館の玄関前の、メタセコイアの木に勢いよく駆け登ったがまた降りられない。猫は、登りは得意だけど降りるのは苦手なのだ。この時ははしごを用意して救出した。三回目は平成十一年の四月。夕方、ミヤーを呼ぶと、声はするが姿は見えない。声をたどっていくと、今度は地面近くから聞こえる。声は、体育教官室の左端にある雨樋の中から聞こえてくるのだ。「えらく狭いところに入り込んだもんだなあ」と思っていると、選手の一とりが、幼稚園側から、ミヤーが体育館の屋根をうろろしているのを発見した。屋根でないでいたミヤーの声は、雨樋を伝って地面から聞こえていたのだ。またしてもはしごだ。幼稚園の庭から体育館の屋根まで、はしごを渡して無事救出した。

若い頃のミヤーはよくモグラを捕まえてきた。食べはしないのだがオモチャにして遊ぶのだ。昔、グラウンドは今のように人工芝ではなく、土だった。その土手でモグラを捕まえる。それをわざわざ体育館の玄関まで持つてくるのである。誉めてもらいたいからだ。ある日、私はミヤーを抱きかかえて、「ミヤー、よくつかまえたねえ。おりこうだねえ。でももういいよ。モグラ、逃がしてやろう。

かわいそうだ」と言って、地面でよろよろしているモグラを、「ほら、はやく逃げる。もう捕まるなよ」と言いながら、足で押して茂みの方に逃がそうとした。しかし、そのモグラは、私の足で押されて転がった拍子に、心臓マヒを起こして死んでしまった。

小鳥もよく捕まえてきた。これも、食べるのではないがゲームとして楽しんでいたようだ。一度だけ現場を見た。テニスコート横の草むらにはしばしば小鳥が虫を食べに来る。そこへミヤーが忍び寄るのだ。至近距離まで近付いたらミヤーが突然ダツシユする。小鳥は驚いて飛び上がる。その飛び上がる瞬間と方向を見事に読み、地上一メートルくらいのところで引っ掛ける。それは見事な名人芸だった。ミヤーはまた、体育館で椅子を並べた集会が大好きである。椅子がたくさんならんでそこに人が集まるとはしやく。だから卒業式や入学式はシャワー室に閉じこめなければならぬ。

ミヤーはたぶん、もうすぐ九才になるはずだ。人間に例えれば五〇才くらいのおばさんだろう。昔ほど元気はなくなったが今でも時々小鳥を捕まえてくる。



平成十二年二月十一日 山崎 純 男

(平成十七年十二月十七日 十九時十二分 永眠)